

終止形に接続する「なり」の意味用法

— 未定・既定の観点からの試み —

三 宅 清

一 はじめに

筆者は既発表の拙稿（例えば三宅清（一九九八）など）の中で、推量の助動詞を未定、既定の観点から分析する試みを行っている。まず、未定、既定という概念を、「らむ」の、いわゆる「原因・理由を推量する用法」を例に、説明する。

1 瘦せ給へる事、いとほしげにさらばひて、肩の程などは、痛げなるまで、衣の上まで見ゆ。何に残りなう見

あらはしつらむと思ふものから（末摘花二二〇・二四）

用例1は源氏の心中で、自分（源氏）は、どうして末摘花の見なくてもいいところまで見てしまったのだらうと思っている場面である。傍線部「らむ」に上接する点線部「残りなう見あらはしつ」は源氏自身の行為なので、思っている源氏にとっては、その時点で既に起こっている（行われている）事態、すなわち「既定」の事態ということになる。

このように、話している（思っている）人物にとって、話している（思っている）時点で既に起こっている（行われている）事態が「既定」の事態である。推量という行為は、簡単に言うと、不明確な事態を対象とする判断であるから、用例1の場合、「らむ」の推量の焦点（Focus）は「らむ」に上接する既定の事態には向かず、自ずとそれに上接する二重傍線部の「何に」という原因・理由を表す、内容が不明確な「未定」の部分に向くことになる。対象が事態そのもの場合は、話している（思っている）人物にとって、話している（思っている）時点で起こっているか（行われているか）否か不明確な事態が「未定」の事態ということになる。

この観点からいわゆる推量の助動詞を分析する有効性は「まし」に触れた拙稿（三宅清二〇〇一）でも証明されている。本稿で扱う終止形に接続する「なり」（以下、「終止な

り」の意味用法は、近世以来、主なものとして「詠嘆」説、「伝聞推定」説などが提示されているが、未定、既定の観点は、その意味用法を統一的に説明するのにも有効と思われる。また、従来、多くの辞書類、一般的な文法書で「終止なり」と関わらせて扱われることが多い「めり」の意味用法についても若干触れる。「終止なり」の分析は主として源氏物語を対象とする。

二― 源氏物語における「終止なり」の分類

言うまでもないが、「終止なり」は、終止形、連体形が同形の四段活用^①の活用語に接続する場合などは、いわゆる断定の「なり」との判別がつきにくい。そこで、便宜的ではあるが、本稿では勉強社刊の『源氏物語語彙用例総索引』の分類に従う。その分類は意味用法からなされた可能性もあるので、方法が循環する憾みはあるが、敢えてそれを考慮した上で分析を行う。前掲書ではいわゆる行変格型活用語に接続する場合、その連体形に接続すると分類されている。本稿では、前述のように終止形に接続する場合に限るので、「侍なり」「ななり」「さなり」「べかなり」などは考察対象から除く。

源氏物語において、「終止なり」は145例見られる。それら

を分析すると、「終止なり」に上接する事態によって、大きく二類に分けられる。それは、①「音や声などから判断した事態」②「人から聞いた事態」である。②はさらに②―1「一般的ではない事態」②―2「一般的な事態」に分けられる。それぞれ挙例して見ていく。なお、二つの類型に涉って解釈される例も存在するので、各類型の用例数は示さない。

①「音や声などから判断した事態」

2 今夜は、まだ更けぬに出で給ふなり。御先の声の遠くなるまに、海士も釣すばかりになるも、我ながら憎き心かなと思ふ思ふ聞き臥し給へり。(宿木一七二八・

一四)

用例2は中君の心中である。それは「思ふ思ふ聞き臥し」から分かる。傍線部「なり」に上接する「出で給ふ」は勾宮の動作だが、中君は「聞き臥し」ている状態で、点線部の「先払いのハ声」が遠くなる」ことから判断している。

3 院はまして思し鎮めむ方なければ、大将の君近く参り給へるを、御几帳のもとに呼び寄せ奉り給ひて、「……御加持にさぶらふ大徳たち、読經の僧なども、皆声やめて出でぬなるを、さりとて、立ちとまりてものおすべきもあらむ。(御法二三九〇・一四)

院(源氏)が大将(夕霧)を几帳のもとに呼び寄せて話し

ている場面である。したがって、点線部の大徳たちの声（声が聞こえなくなったこと）も凡帳越しに聞きたことになり、傍線部「なり」に上接する「出でぬ」は、声が聞こえなくなったから出かけたという「声」に基づく判断と考えられる。

4 葎打ち果てつるにやあらむ、うちそよめく心地して、人々あかるるけはひなどすなり。「若君は、いづくにおはしますならむ。この御格子はさしてむ。」とて鳴らすなり。「静まりぬなり。入れて、さらばたばかれ。」と宣ふ。（空蟬八九・五）

点線部の空蟬付きの女房たちの格子をしめようという声としめる音（「鳴らす」）から、話し手の源氏が、傍線部「なり」に上接する「静まりぬ」（女房たちが「寝静まった」という判断を行っている）。

5 宵うち過ぐる程に、「宇治より人参れり。」とて、門忍びやかにうち叩く。さにやあらむと思へど、弁開けさせれば、車をぞ引き入るなる。あやしと思ふに、「尼君に対面たまはらむ。」とて、この近き御庄の預の名乗りをせさせ給へれば、戸口にゐざり出でたり。（東屋一八四四・八）

用例5は、薫が浮舟の隠れ家を来訪した場面である。二重傍線部の門を「開けさせ」たり、「あやしと思」っているの

は浮舟付きの弁の尼であるが、傍線部「なり」に上接する「車をぞ引き入る」事態に関しては、弁は実際には見ていない。それは、後述の二重傍線部「戸口にゐざり出でたり」から分かる。つまり、その時点で初めて弁は戸口にまで行ったからである。すなわち、傍線部「なり」に上接する「車をぞ引き入る」は明確には示されていないが、その音から判断した事態と言うことができる。

② 「人から聞いた事態」

「人から聞いた事態」はさらに「一般的ではない事態」と「一般的な事態」に分けることができる。

②-1 「一般的ではない事態」

6 国の内は、守のゆかりのみこそはかしこき事にすめれど、ひがめる心は、さらにさも思はで、年月を経けるに、この君かくておはすと聞きて、母君に語らふやう、「桐壺の更衣の御腹の源氏の光君こそおほやけの御かしこまりにて、須磨の浦にものし給ふなれ。（須磨四三〇・一）

用例6は、話し手の明石の入道が、点線部のように、源氏が須磨にしていることを人から聞いて、そのことを母君に話している。傍線部「なり」に上接する「須磨の浦にものし給ふ」という事態は、人から聞いた事態である。それが「一般的ではない事態」というのは、誰にとっても「人から聞

いた事態」のではなく、話し手の明石の入道という特定の人物が聞いた事態だからである。

7「文はやすかるべきを、人の物言ひいとうたてあるものなれば、『右大將は、常陸守の女をなんよばふなる。』なども取りなしてむをや。その守の主、いと荒々しげなめり。」と宣へば（東屋一八四一・一四）

用例7は、話し手の薫が常陸守の女に手紙をやりたいのだが、点線部のように、「人の物言ひ」（人の噂）が嫌なので……という場面である。もう一箇所点線部「取りなし」も手紙をやると、人は無理に解釈するということである。その噂が『内傍線部「なり」に上接する』右大將は常陸守の娘に言い寄っている』という事態である。そのような事態が起こったと想定していることになるが、想定上であっても、誰ということではなく、「人から聞いた事態」と言うことができる。

8 右衛門の督の下にわぶなる由、内侍のかみものせられし、その人ばかりなん、位など今少しものめかしき程になりなば、などかはとも思ひ寄りぬべきを（若菜上一〇三九一）

用例8は、概略、話し手の院に、二重傍線部の右衛門の督が内心嘆いていることを内侍のかみが言った（点線部「ものせられし」という内容である。すなわち、傍線部「なり」

に上接する事態は、話し手の院が直接右衛門の督の様子を見たのではなく（さらに言えば、内侍のかみも右衛門の督の下（心中）は他者の心中なので、実際にその通りなのかどうか分らない）、内侍のかみから「聞いた事態」と言うことができる。

9「……『よろづの事足らひてめやすき朝臣の、妻をなん定めざる、はやさるべき人選りて後見をまうけよ。上達部には、我しあれば、今日明日といふばかりに、なし上げてむ』とこそ仰せらるなれ。（東屋一八〇二五）この場面は、話し手の仲人が少將の人物を称揚するために、『内の帝が言った（点線部「仰せらる」）と常陸守に話している。しかしながら、身分的に、仲人が帝の言葉を直接聞けるはずもなく、傍線部「なり」に上接する事態「仰せらる」は「人から聞いた事態」として述べていることが分かる。

②—2「一般的な事態」

10 程々につけて、宿世などいふなる事は、知り難きわざなれば、よろづに後ろめたくなん。（若菜上一〇三七・三）

傍線部「なり」に上接する「宿世などいふ」という事態（宿世ということ）は、当時の世間一般で広く言われていた、まさに「一般的な事態」である。

11 大貳の北の方、さればよ、まさにかくたづきなく人悪
き御有様を数まへ給ふ人はありなむや、仏聖も罪輕き
をこそ導きよくし給ふなれ（蓬生五・二六・六）

12 かくのみ物を思せば、物思ふ人の魂はあくがるなるも
のなれば、夢も騒がしきならむかし。（浮舟一九・二五・

一〇）

用例11、12の傍線部「なり」に上接する「仏聖も罪輕きをこ
そ導きよくし給ふ」（仏や聖だつて罪障の輕い人をこそよく
お導きになる）「物思ふ人の魂はあくがる」（もの思いをす
る人の魂は身を離れてさまよう）事態も当時、世間一般に
おいて言われていたことである。

例えば「物思ふ人の魂はあくがる」の類似例は源氏物語に
も散見するが、後拾遺和歌集の和泉式部の歌にも

* 物思へば沢の螢も我が身よりあくがれ出づる魂かとぞ
見る

とある。

13 文人擬生などいふな事どもよりうちはじめ、すかす
かしうはて給へば、ひとへに心に入れて、師も弟子
もいとは励みまし給ふ。（少女六・七四・一一）

傍線部「なり」に上接する「文人擬生などいふ」という事
態の「文人擬生」は「擬文章生」（中古、大学寮で、詩文や
歴史を学び、試験五題のうち、三題以上に及第した者）の

ことで、当時のいわゆる上層階級では一般的な（一般的に
言われていた）事態であつたと言える。

14 内の大臣の心ばへも、なべての人にはあらずと世人も
めで言ふなれど（少女七・〇三・三三）

15 年頃かくてはぐくみ聞こえ給ひける御志を、僻様にこ
そ人は申すなれ。（藤袴九・三三・八）

用例14、15の傍線部「なり」に上接する事態も、点線部「世
人」「人」が示されているように「世間で言われている」と
言えるが、用例10、13のような「宿世」「仏聖の導き」「物
思ふ人の魂」「文人擬生」が、使用されている場面を離れて
もその時代においては世間一般に言われていたことなのに
対し、14では「めで言ふ」の対象である内大臣、15では「御
志」の主体である源氏の行動に関して世間の人々が言っ
ているという、個別的な性格を持っていると言えよう。した
がつて、14、15の世間の人々は、内大臣、源氏に関わる人々
とも言え、それ故に10、13には見られない「世人」「人」と
いう語を敢えて用いているとも考えられる。

二―二 源氏物語における「終止なり」の解釈

本節では二―一で分類した類型について一定の解釈を試み
る。

①「音や声などから判断した事態」に属する例は、文字通り音や声に関する事象を手掛かりに「終止なり」に上接する事態を話し手（心内文の場合は思っている人物）が判断していることと纏めることができる。そして、その事態を話し手（思っている人物）が実際には見ていないことも前後の文脈から分明である。すなわち、「終止なり」に上接する事態が実際に起こっているか（行われている）か否かは不明確と言える。第1節で述べた既定、未定の別で言えば、話している（思っている）時点で既に起こっている（行われている）既定の事態ではなく、起こっている（行われている）か否か不明確な未定の事態である。

②「人から聞いた事態」の1「一般的ではない事態」も2「一般的な事態」も人から聞いたということ、話し手や思っている人物が実際には見ていないという点で共通する。やはり「終止なり」に上接する事態は①と同じく未定の事態である。

また、近來、「終止なり」は「伝聞推定」と言われることが多いが、上述のように、対象が不明確なので、推量、あるいは推定と言え、さらに①②とも聴覚に関わっている点では共通するので、「聴覚に関わる推定」と纏めることもできよう。「聴覚に関わる推定」は従来の「伝聞推定」説に通じるところがある。「伝聞推定」説に對峙する立場として

「詠嘆」説があるが、近世以来の「終止なり」に関する諸説を改めて精査する必要があるので、その点は本稿では措く。

以上のような「終止なり」の意味用法を承けて、それと類似した意味用法を有する現代語として、先行研究から「ようだ」「らしい」を取り上げ、その関係を考えてみたい。「ようだ」「らしい」に関する先行研究は膨大な数があるが、その中で最近の纏まった論として、菊地康人（二〇〇〇）を取り上げる。菊地はその中で、従来の主な論を整理しながら、ヨウダとラシイの相違の要点を次のように述べている。

観察対象に密着して判断内容（「様子」）が述べられる（と捉えられる）場合はヨウダ、観察から距離を置いて（推論を介在させ、あるいはそもそも観察へ情報の入手）が伝聞に基づいて行われ、判断内容を述べる場合はラシイを使う。（五〇頁）

重複するようだが、筆者なりに纏めると、「らしい」の方が「ようだ」より観察対象と判断内容との間に距離があり、そこに推論や伝聞が介在するということであろう。この説を基に上述の類型①②を見ていく。

①は「音や声などから判断した事態」なので、この類型に属する例は、すべて上掲の引用中の言葉を使うと、観察対象（音や声など）から距離を置いて判断内容（用例中の傍線部「なり」）に上接する事態）が述べられている。例え

ば、用例2では、観察対象は「御先の声遠くなる」であり、判断内容は「出で給ふ」である。思っている中君の判断内容「匂宮方」出で給ふ」は中君が実際に見た訳ではなく、「御先の声遠くなる」という「声」から判断したものである。つまり、実際に見ての判断より観察対象との間に距離がある。そうすると、①は「らしい」が適当と思われるが、その場面で、「御先の声遠くなる」と「出で給ふ」とが思っている中君の中で自然に結び付く関係だとしたら、両者の距離は密着しているとも考えられるので、「ようだ」にも近い性格を持っていると言えよう。例えば、用例3の観察対象「皆声やめて」と判断内容「出でぬ」との関係も同様である。このように、音や声などでも、単にそれらと判断内容との物理的な距離だけではなく、その関係に関する話し手や思っている人物の経験に基づく距離感も考慮する必要があると考えられる。①は基本的に「らしい」に近い性格を有しながらも、例によっては「ようだ」に近いものも見られると言えよう。

②―1は「人から聞いた事態」なので、基本的に観察対象と判断内容との間に距離があり、そこに推論が介在する余地がある。例えば、用例6は観察対象は「この君（源氏）かくておはす」という話し手の明石の入道が聞いた話で、判断内容は、その話を基にした「（源氏方）須磨の浦にものし

給ふ」という事態である。話し手の明石の入道は源氏が須磨にいたことを実際に見た訳ではなく、あくまで推論である。「らしい」の性格を有している。しかしながら、用例6の場合、観察対象の内容が「この君かくておはす」の「この」「かくて」などの指示詞に見られるように、確度が高いので、判断内容との距離は近いとも考えることができる。そう捉えれば、「ようだ」に近いと言える。用例7は観察対象が「人の物言ひ」という曖昧なものであり、また用例8は判断内容が「右衛門の督の下にわぶ」といった話し手からは他者の心中であるため、各々判断内容や観察対象との間に距離があり、そこに推論が介在する余地がある。「らしい」に近いのではない。用例9は、前述のように、観察対象である帝の言葉と判断内容である「仰せらる」（その言葉が帝が言われた）とは距離は近いが、どちらも話し手の仲人が直接聞けるはずもなく、すなわち距離があり、そのことは聞き手の常陸守にも分명한ことなので、推論が介在していると思われる。つまり「らしい」に近い性格を持っていると思われるが、このように、単に観察対象と判断内容との距離だけではなく、観察者である話し手（さらには聞き手）との関係も考慮に入れる必要があろう。

②―2「一般的な事態」のうち、用例10・13の観察対象は、言い伝えなど、当時の世の中で一般的に言われている

ことと括ることができる。すなわち、人から聞いたことと言っても、話し手である観察者には当たり前、一般的な事になっていられるとも言える。そうすると、観察者にとって、観察対象の言い伝えと判断内容である言い伝えの内容（例えば、用例12では観察対象は言い伝えであり、判断内容はその言い伝えの内容「物思ふ人の魂はあくがる」）との距離は極めて近い。したがって「ようだ」に近いと考えられるが、この場合、聞き手との関係を考慮する必要がある。すなわち、話し手が、観察対象と判断内容との距離の近さを聞き手も同様に認識していると判断したり、あるいは、そのような認識を聞き手に求める場合は「ようだ」に近いだろうし、話し手はその距離の近さを認識しているが、聞き手に対しての何らかの配慮で、距離が近いこととして伝えないなら「らしい」に近いだろう。この聞き手との関係については、菊池（二〇〇〇）でも触れられている³。

用例14、15も噂という点では「一般的な事態」に属するが、観察対象の「世人」「人」（物言ひ）などが明確に示されており、また、判断内容も前述のように、内大臣、源氏という特定の人物に関わる点で、用例10、13のように漠然とした言い伝えとは異なる。しかしながら、観察対象と判断内容との距離が近いかわいには、やはり観察者である話し手と聞き手が関わってくると考えられる。

以上、各類型について現代語の「ようだ」「らしい」との関係を考えてきた。前述のように「終止なり」は「聴覚に関わる推定」と纏めることができ、その「聴覚」という点からは、例えば「視覚」などと比べると、菊地の言を借りれば、観察対象と判断内容との間に推論が介在する可能性が高い。すなわち「らしい」に近いと言えそうだが、必ずしもそうとは言いい切れないことは上述の通りである。

また、終止形接続の「そうだ」は、「ある人から聞いたこと」をそのまま他の人に伝える「用法と言え。したがって、人から聞いたことではない①「音や声などから判断した事態」には当てはまらないが、それが「一般的ではない事態」でも「一般的な事態」でも、②「人から聞いた事態」には当てはまると一応は言えそうである。

三 源氏物語以外の例に関する一考察

源氏物語における「終止なり」の意味用法は上述のように、「聴覚に関わる推定」と纏めることができた。「終止なり」の意味用法については、近世以来、多くの人々の間で説が提示され、また議論もなされてきた。最近ではやや収まったかに見え、一般的な文法書や多くの辞書類では、その意味用法として、いわゆる「伝聞推定」説を取り上げて

いるものが多い。「伝聞推定」は聴覚に関わる行為なので、前にも述べたが、本稿での「聴覚に関わる推定」も、従来の説の中では、「伝聞推定」説に近いと言えよう。それでは、源氏物語以外の用例はどうであろうか。源氏物語以外の用例の全体的な検討は別稿に譲ることにし、松尾（一九一八）以来の「伝聞推定」説に對峙する立場の根拠として挙げられている例を検討してみたい（万葉集のみ。用例後の括弧内の数字は歌番号）。

16 闇の夜に鳴くなる鶴の外のにに聞きつつかあらむ逢ふ
とはなしに（五九二）

△闇の夜に遠く聞える鶴の声のように、あなたの声を遠く聞くばかりでいることでしょうかと岩波大系本の大意にはある（以下、△ ∨ 内は大系本の大意）。傍線部「なり」に上接する事態「闇の夜に鳴く」は、言い伝えでもなく、この歌の作者である笠女郎にとって、その時実際に起こっている（聞こえている）ことと解釈するのが妥当である。

17 秋萩の散りのまがひに呼び立てて鳴く鹿の聲のはるけさ（一五五〇）

△秋萩が繽紛と散るとき、呼び立てて鳴く鹿の聲のはるけさと聞えることよこの歌も、作者の同伴坂上郎女には、傍線部「なり」に上接する「呼び立てて鳴く」という事態はその時実際に起こっていると解釈される。

18 大夫の鞆の音すなり物部の大臣楯立つらしも（七六）

△勇士がが弓を射て鞆に弦のあたる音が聞えてくる。將軍が楯を立てて訓練をしているらしい傍線部「なり」に上接する事態「大夫の鞆の音す」は作者の元明天皇にとってはその時実際に起こっていることである。

19 天の河浮津の浪音さわくなり我が待つ君し舟出すらし
も（一五二九）

△天の川の天上の波止場の波の音のさわぐのが聞える。私の待つあなた（彦星）が、舟出をなさるらしいこの歌は作者の山上憶良の七夕にちなんで作った一連の歌の中の一詩である。したがって、想像上のことが多く詠まれている。傍線部「なり」に上接する事態「天の河浮津の浪音さわく」もその一つであるが、憶良は実際に「……浪音がさわく」ということがその時実際に起こっているつもりで詠んでいる。

20 木のくれの繁きおのへをほととぎす鳴きて越ゆなり今
し来らしも（四三〇五）

△木が繁って暗い峰をホトトギスが鳴いて越える声が聞える。（よつやく）今こそこちへ鳴いて来るらしいこの歌も、傍線部「なり」に上接する事態「ほととぎす鳴きて越ゆ」は作者の同伴家持にとってはその時実際に起こっていることと解釈される。

従来、これらの歌は、「鳴く」「音す」など、聴覚に關係する語に直接的に「終止なり」が接続しているために、そこに改めて「伝聞」が付け加えられる必要はなからうとして、「伝聞推定」説を退ける根拠としてよく挙げられてきた。確かに、前述したように、「なり」に上接する事態は、「その時（既に）起こっている（聞こえている）」すなわち「既定の事態」である。また、既定の事態であることと、用例18、19、20の点線部で示したように、それを基にさらに「らし」で推量していることは無關係ではないと考えられる。

わずか5例からの推測ではあるが、「終止なり」に上接する事態が既定であった時期もあるのではないか。それが源氏物語で見たように、未定の事態を対象とするようになったのは、前掲の例も、既定とは言っても、やはり「鳴く」「音す」など、聴覚に關係する語が用いられていることと關係があるのではないか。「鳴く」「音す」などはその時実際に（既に）起こっている（聞こえている）としても、その声や音を出している実体である用例16、20で言えば「鳴く鶴」「鹿の声」「大夫の鞍」「天の河（の）浮津の浪」「ほととぎす」は、各々の作者は実際には見ていない。「鳴く鶴」は「闇の夜に鳴く鶴」であるし、「鹿の声」は「鹿の声のはるけさ」である。20の「ほととぎす」も「木のくれの繁きおのへ……」を鳴きて越ゆ」と、作者が実際に見ることが難しい状況を

表現にも示されている。聴覚のみで、その実体を視覚として確認していないということは、そこに未定の要素が介入しうる余地があるということである。「既定的」と言った方が正確かもしれない。すなわち、仮に源氏物語以前に「終止なり」に上接する事態が既定的である時期があったとしても、源氏物語のように、未定の事態を上接する状況に移行する可能性を含んでいたということである。ちなみに源氏物語では、音や（鳴く）声などを表す語に直接的に「終止なり」が接続する例は見られない。

上代のわずかな例から結論づけられないが、従来の「伝聞推定」か「詠嘆」かという議論とは別に、このような既定的な事態を対象とする用法から未定の事態を対象とする用法へという変化も一つの捉え方として提示しておきたい。もちろん、万葉集の他の「終止なり」の例や、中古でも、源氏物語のような散文だけではなく、和歌の用例の検討も必要である。

四 付言―「めり」について―

本稿は表題にもあるように、「終止なり」についての考察が主たる目的であるが、多くの辞書類、一般的な文法書で「終止なり」と並べて扱われることが多い「めり」について

も若干筆者の考えを示しておきたい。挙例は源氏物語からである。

21君にも、かくうらなくたゆめて這ひ隠れなば、いづこ

をはかりとか我も尋ねむ、仮初の隠處とはた見ゆめれば、いづかたにもいづかたにも移ろひ行かむ日をいつ

とも知らじと思すに（夕顔一一四・一三）

用例21は源氏の心内文である。傍線部「めり」に上接する事態「仮初の隠處とはた見ゆめ」は、点線部「見ゆ」からも分かるように、思っている源氏自身の目に実際にそのように見えていることである。

22げにはた、かくやむごととなりつる方も失せ給ひぬめるぞ、さてもあらむに、などか口惜しからむ。（葵三二

四・三）

用例22は右大臣が弘徽殿の皇太后に、「このように大切にしていた方（葵の上）もお亡くなりになった……」と言っている。点線部の指示詞「かく」からも分かるように、話し手の右大臣にとっては、傍線部「めり」に上接する事態である葵の上が亡くなったことは自明のことである。

23亡くなり侍りし程にこそ侍りしか。それも女にてぞ。

それにつけて、物思ひのもよほしになん、齢の末に思ひ給へ嘆き侍める。（若紫一六一・一四）

用例23は僧都が源氏に話している場面である。傍線部「め

り」に上接する事態「齢の末に思ひ給へ嘆き侍」は、僧都の心中ではあるが、僧都自身のことなので、話し手の僧都にとっては自明のことである。

24辱め給ふめる官位、いとどしく、何につけてかは人め

かむ。（帚木五〇・一〇）

用例24はいわゆる「雨夜の品定め」の左馬頭が指食いの女との体験談を語っている箇所である。傍線部「めり」に上接する事態「辱め給ふ」は少し前の文脈にある、女が左馬頭に対して「よろづに見だてなく、ものげなき程を見過ぐして……」と言った内容を承けている。つまり、話し手の左馬頭にとっては既に自分自身が実際に聞いていることである。

以上、四例のみではあるが、そこに共通して言えることは、「めり」に上接する事態はいずれも話し手や思っている人物にとって、話している（思っている）時点で既に起こっている（行われている）こと、すなわち既定の事態であるということである。このような例は「終止なり」には見られなかった。

今、簡単に、推量（推定）という行為が不明確な事態（未定の事態）を対象とすると定義すれば、既定の事態を対象とする前掲の「めり」は、単純に推量（推定）とは言えないのではないか。辞書類や一般的な文法書の中には「めり」

に「婉曲」という項目も立てているもの多い。「婉曲」の定義も慎重に行わなければならないが、「断定をやわらげる」という程度なら、断定してしかるべき既定の事態を対象としている「めり」はまさに婉曲と言うに相応しいと思われる。

もちろん「めり」は前掲のような既定の事態に下接している例ばかりではない。

25この御息所、二条の君などばかりこそはおしなべての様には思ひたらざめれば、恨みの心も深からめ。(葵二九三・一三)

26親など立ち添ひ、もて崇めて、生い先こもれる窓のうちなる程は、ただ片かどを聞き伝へて、心を動かす事もめり。(帚木三七・一二)

用例25の傍線部「めり」に上接する事態は、概略、「(源氏ガ)二条の君に対してだけは、並々の気持ちでは思っていない」という源氏の心中である。25は左大臣家の人々の発話であるが、左大臣家の人々にとって源氏は他者であり、他者の心中は、それが事実か否か(そのような気持ちが起こっているか否か)は不明確で、未定の事態と言える。

用例26は頭中将が源氏に一般的な女性論を述べている場面である。傍線部「めり」に上接する事態は「(男ガ女性ノ才能ノ)一端を聞きつけて心を動かす」という「男」の心中

である。頭中将からは「男」は他者であり、その心中は25と同様に未定の事態である。

用例25、26は一応、「めり」に上接する事態は未定と言えそうだが、25の源氏の心中はそれまでの文脈から、左大臣家の人々にも容易に分かることであり、26などは、頭中将が「男」の一般論として述べているが、それは頭中将が自身自身の体験を基に述べているので、その点では自分自身の心中とも言え、未定とは言ひ切れない。「めり」全体を精査した訳ではないので断言はできないが、「めり」は「終止なり」とは異なり、既定の要素をより多く含んでいそうである。そして、それは「終止なり」が既述のように「聴覚に關わる推定」であるのに対し、語源に触れるのは慎重にしなければならぬが、「めり」はやはり「視覚」と關わっているからではないか。聴覚に比べ、視覚による判断は、実体(觀察対象)を見た上での判断という点で、未定の部分が少なく、したがって、推量(推定)の入り込む余地も少ない。そうなると、従来、「終止なり」は「聴覚に基づく推定」、「めり」は「視覚に基づく推定」と捉えられ、両語を關わらせて扱われることが多かったが、本稿の「未定」「既定」という観点からは、成立当初はともかく、中古の散文では、かなり違う性格を持つに到ったと言ふこともできる。

五 おわりに

以上、源氏物語の「終止なり」を中心に論を進めてきた。本稿は、従来様々な説が提出されてきた「終止なり」について、第一節でも触れたように、筆者が他の推量の助動詞に関しても試みている「未定」「既定」という観点から考察したことに独自性がある。その結果、次の三点の結論が得られた。

I 中古の散文における「終止なり」は未定の事態を対象としており、「聴覚に関わる推定」と纏めることができる。

II 上代の歌に用いられている「終止なり」は既定的な事態を対象としているものも見られる。それらも聴覚と関わるため、未定の事態を対象とする用法へと変遷する可能性を有している。

III 従来、「終止なり」と関わらせて論じられることが多い「めり」は既定の事態を対象とする例も見られ、その点で「終止なり」とは一線を画す。「めり」のそのような性格は、視覚と関係するものと思われる。

II、IIIは限られた用例から導き出されたものである。本稿の中でも幾々触れてきたが、まだ残された問題は多い。歴

史的な面からの「終止なり」の上代の例の精査や、散文と韻文との比較という点からの源氏物語と同時代の中古の歌での用いられ方の違いなどがある。また、研究史の面からは、特に「詠嘆」説がどのようにして生じたのかという問題がある。

このように、残された問題は多いが、それらの問題も含めて、「未定」「既定」という観点から、本稿では少ししか触れられなかった「めり」や、いわゆるム系の助動詞でも、基本的に未定と思われる「む」と既定の用法も有する「らむ」「けむ」との違いなどについても、別稿で改めて考察していきたい。

注1 近代に入ってからには、「伝聞推定」説は、例えば松尾捨治

郎（一九一八）佐伯梅友（一九八八）など、「詠嘆」説は

竹岡正夫（一九五五）原田芳起（一九五五）などが挙げら

れる。また、構文論の立場からは北原保雄（一九六六）な

ど、モダリティ論の立場からは高山善行（一九九〇）の研

究がある。

注2 高山善行（二〇〇二）二一頁などにも指摘がある。

注3 テキストは『源氏物語大成本文篇』（中央公論社）に拠る。

用例後の（ ）内の数字は、各々大成本文の頁数、行数を

示す。表記は適宜改めた。

注4 菊地(二〇〇〇)五五頁。

注5 江戸語の「そうだ」について、岡部嘉幸(二〇〇〇)に本稿の未定、既定と同じような観点からの考察がある。本文で「一応」と述べたのは、「そうだ」などの伝聞形式は、それが用いられるのが会話文か心内文かということや構文上の問題などが関わってくるからである。その点については森山卓郎(一九九五)に記述がある。

注6 竹岡正夫(一九五五)に挙げられている例に拠る。

注7 原田芳起(一九五五)では「59例ばかり」竹田純太郎(一九八六)に拠ると、60例との記述がある。

注8 例えば『日本国語大辞典』(第二版)では、「推量の助動詞」としている。

参考文献

岡部嘉幸(二〇〇〇)「江戸語における終止形承接のソウダに

ついて」『国語と国文学』七七―九

菊地康人(二〇〇〇)「ようだ」と「らしい」―「そうだ」「だ

ろう」との比較も含めて―『国語学』五一―一

北原保雄(一九六六)「へ終止なりとへ連体なりとへその分

布と構造的意味―『国語と国文学』四三―九

佐伯梅友(一九八八)『古文読解のための文法(下)』三省堂

高山善行(一九九〇)「連体ナリと終止ナリの差異について」

『国語学』一六三

―(二〇〇二)『日本語モダリティの史的研究』ひつじ書房

竹岡正夫(一九五五)「いわゆる伝聞推定の助動詞ナリの本義」

『国語国文』二四―七

竹田純太郎(一九八六)「終止ナリ」の考察―上代の用例を中心として―『国語国文』五五―一二

原田芳起(一九五五)「伝聞推定の「なり」」『国語国文』二四―七

松尾捨治郎(一九一八)「小疑三束」『國學院雑誌』二五―八

三宅 清(一九九八)「助動詞「らむ」の意味用法―未定と既定―」『野州国文学』六二

―(二〇〇二)「助動詞「まし」の意味用法―既定の事態に関わる想定―」『國學院雑誌』一〇二―八

森山卓郎(一九九五)「伝聞」考」『京都教育大学国文学会誌』二六